

# 第1学年（単式学級） 算数科学習指導案

指導者 西川 聡美

- 日 時 令和7年10月29日（水）13：45～14：30
- 学 年 第1学年 3名
- 単 元 名 「ひきざん」
- 本質的な問い ひき算ができると、どんなよさがあるのだろうか？
- 単元を貫く問い 繰り下がりのあるひき算をするには、どうしたらよいのだろうか？

## 1. 単元の目標

（十何）－（1位数）で繰り下がりのある減法について理解し、計算することができるとともに、具体物や図などを用いて計算のしかたを考える力を身に付ける。また、減法の計算に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぶ態度を養う。【学習指導要領との関連 A(2)ア(ア)(イ)(ウ)、A(2)イ(ア)】

## 2. 単元観

繰り下がりのある減法の計算のしかたを考えていく上で大切なことは、被減数を分解して「10といくつ」という捉え方をしていくことである。その捉え方をもとにした計算方法には「減加法」と「減々法」があり、どちらも10に着目して数を分解することで、既習である10以下の減法により解決できるというよさがある。

本単元を通して、10に着目し、繰り下がりのある計算の意味やその方法を理解し、正しく計算できる力、また繰り下がりのある減法の計算のしかたを、具体物や言葉、式、図を用いて表現したり考えたりする力を養うことができる。

## 3. 児童観

本学級の児童は、授業の始めに問題解決への見通しを立て、具体物等を使って問題を解決しようとする姿が見られる。問題解決に向けて、自分の考えをもつことはできるが、少人数のため、多様な考え方は出にくい。レディネステストを行った結果、「繰り下がりのない減法の計算ができる」「繰り下がりのない減法の立式ができ、答えを求めることができる」ともに全員が正答であった。

## 4. 指導観（特に重視したい指導者のファシリテーターとしての役割）

指導に当たっては、求残の場面で減法を用いて解決すること自体は既習であるが、これまでの学習の中で解決してきたものとは違うことに気づかせ、「どうやって計算したらよいのだろうか」という問いをもたせ、しっかりと個人思考をさせる中で主体的な学びを促す。計算のしかたを考える際には、自分の考えをもてるように算数ブロックなどの半具体物を使って操作する場面を多く設定し、ブロックを操作しながら計算のしかたを説明させるようにしたい。一斉の場では、【対】一人ひとりが発言する時間をしっかりととり、それぞれの考えを受け止めながら、減加法、減々法の考えを児童から引き出していく。

## 5. 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	被減数や減数の数値に応じて、計算のしかたを工夫することができる。	被減数や減数の数値に応じて効率的な計算のしかたが異なることを見いだしている。	それぞれの計算の工夫について、よさを見いだそうとしている。
B	10のまとまりに着目し、繰り下がりのある計算のしかたを理解して、正しく計算ができる。	繰り下がりのある減法の計算のしかたを、具体物や図等を用いて表現したり考えたりしている。	10のまとまりに着目し工夫して計算したり、その過程を式や図などに表現したりしようとしている。

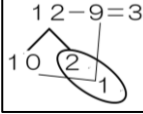
## 6. 単元計画（全10時間） 本時は1時間目

- ① **繰り下がりのある減法の計算のしかたを考える。（本時）**
- ②③④⑤⑥ （十何）－（1位数）の減法で、繰り下がりのある場合の計算の意味やその方法を理解する。
- ⑦⑧ カードを用いて、繰り下がりのある減法を習熟する。
- ⑨ 文章題を読んで、加法、減法のどちらを用いればよいかを考え、適切な演算を用いて計算する。
- ⑩ 既習事項の確かめをする。

7. 本時の学習

【本時の目標】 減法の問題場面であることに気づき、繰り下がりのある減法の計算のしかたを考える。

【準備物】 算数ブロック

<p style="text-align: center;">学習活動</p> <p style="text-align: center;">発問 (●) と 予想される児童の反応 (・)</p>	<p style="text-align: center;">指導上の留意事項 (○) 評価規準 (評価方法) (★)</p> <p>【場】 場のデザインのスキル (場をつくりつなげる) 【対】 対人関係のスキル (受け止めて引き出す) 【構】 構造化のスキル (かみ合わせて整理する) 【合】 合意形成のスキル (まとめて分かち合う)</p>
<p><b>1 前時までの学習を振り返る</b></p> <p>●「たし算」では、どんなことがわかったかな。 ・10のまとまりを作って計算すると計算しやすい。</p> <p><b>2 問題をつかむ</b></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>どんぐりが12こありました。こまをつくるのに9こつかいました。 のこりのどんぐりは、なんこですか。</p> </div> <p><b>3 見通しをもつ</b></p> <p>●何算が使えるかな。 ・9個減るからひき算。 ・「のこりは」だからひき算。 ●これまでのひき算と何が違うかな。 ・ばらの2から9はひけない。 ●たし算の時に10を作ったけど、ひき算でも10を使うと計算しやすいのかな。 ・10のまとまりがないから難しい。 ・10のまとまりを作れば計算しやすいと思う。</p> <p><b>4 めあてをつかむ</b></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>12-9のけいさんのしかたをかんがえよう。</p> </div> <p><b>5 一人で考える</b></p> <p>・12から1個ずつ取っていく。 ・10を10と2に分けて、10を作ってから計算する。</p> <p><b>6 みんなで話し合う</b></p> <p>・12を10と2に分けて、先に10から一気に9個取って、残りの1個と2個で3個になる。(減加法) ・2の方からまず9個の内の2個を取って、10のまとまりの方から9個の内の7個取ったら残りが3個になる。(減々法) ●たし算の時のようにブロックを使わずに式で求めたらどうなるかな。 ・12を10と2にわけて書けばいい。</p> <p><b>7 学習のまとめをする</b></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>12を10と2にわけて、さきに10から9をひいたらけいさんできる。</p> </div> <div style="text-align: center; margin: 5px 0;">  </div> <p><b>8 たしかめの問題を解く</b> ①16-9    ②11-9    ③14-8</p> <p><b>9 振り返りをする</b></p>	<p>○前時までの既習内容を掲示する。 ○「さんすうことばのちょきんばこ」を使って、前時までの学習を振り返らせる。</p> <p>○絵を見て対話させることで、場面を具体的にイメージさせる。 ○問題の中の大切な数値を把握しているか、問題文に印を付けながら確認する。</p> <p>★問題が減法の用いられる場面であることに気付いている。(ノート、発言)</p> <p>○これまでの繰り下がりのない減法との差異を意識させることで、10から9をひく解決策の足掛かりをつくる。</p> <p>○10に着目できない児童には、「数えひき」などの方法を認めつつ、10に着目できるように、1個ずつ取ることの大変さに言及するなどして、ブロックをまとめて取る操作を促す。</p> <p>★10に着目して、繰り下がりのある減法の計算のしかたを考えている。(ノート、机間指導)</p> <p>○【対】一人ひとり発言する場をしっかりとらせ、それぞれの考えを受け止める。 ○減加法だけでなく、減々法を考える児童が出てきた場合は、減加法同様に数を分解していることを価値付けながらも、第3時で扱うことを約束し、まずは減加法を確実に押さえる。</p> <p>○これまでブロック操作により表現していた減加法を、式表現と関連付けながらまとめる。 ○児童の言葉を使って、一緒にまとめる言葉を考える。</p>

【振り返りの視点】 ①めあてに対して分かったこと ②もっと考えてみたいこと  
③もっと調べてみたいこと ④もっと工夫してみたいこと ⑤友だちの考えのよさ